

天皇と印刷局

天皇にまつわる製品

印刷局は、150年の歴史の中で折にふれ当代の天皇の行幸を仰いでおり、これに応えるべく、印刷局ならではの技術を用いた製品を献納してきた。

また、宮内庁からの依頼を受け、天皇にまつわる歴史的な製品の製作を担ってきた。さらに、技術練磨や研究等を目的に各種の技術を用いて、歴代の天皇の肖像や皇居等をテーマに試作品や習作を製作しており、技術の粋を集めた数々の製品が残っている。

印刷局の伝統技術

1.彫刻技術(凹版画)

金属板に直接手作業で彫刻する技法(直刻凹版、エングレーヴィング)。彫刻画線によって図柄を細部まで表現する芸術性の高い技術で、偽造防止効果が高く、立体的で重厚感のある仕上がりとなることから、お札の肖像などの印刷に欠かせない重要な技術となっている。

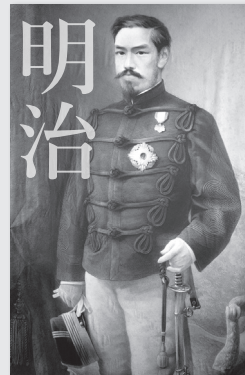
印刷局のお雇い外国人キヨッソーネ(明治8(1875)年~明治24(1891)年在籍)によりもたらされた技術で、144年にわたって受け継がれている。



明治天皇御軍装
エドアルド・キヨッソーネ 彫刻
明治26(1893)年

2.すかし(すき入れ紙)

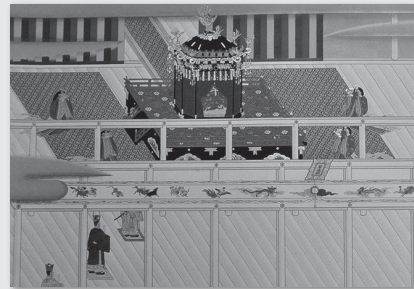
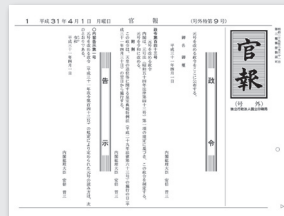
紙をすく段階で紙の厚さを調整し、図柄を表現する高度な製紙技術。お札にも使われる複雑な「白黒すかし」の技法は、明治12年に完成したもので、140年にわたって受け継がれる門外不出の技法である。なお、お札のすかしは印刷局外での製造は禁止されている。



昭和



令和



大正



平成



令和元年度

秋の特集展

改元と歴代天皇
印刷局の逸品から

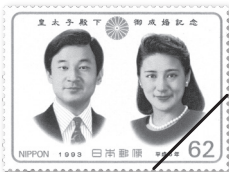
印刷局と皇室行事とのかかわり



国立印刷局(以下、印刷局)は、明治4(1871)年の創設以来、お札や切手、官報、諸証券類の製造に携わっており、これらの重要製品に欠かせない高度な製紙・印刷技術の研究開発、実用化を続けている。



印刷局が携わる製品の中で、歴代の改元や天皇の即位等の重要な皇室行事に最も関係が深いのは、官報や記念切手である。一方、明治から昭和にかけて、印刷局の独自技術を用いて製造した献納品や、宮内庁からの受注品のほか、技術練磨を目的とした試作品等のなかにも、歴代天皇に関連するものを見出すことができる。



天皇にまつわる記念切手や製品の数々は、見た目には華やかなだけでなく、当代の印刷局の最高技術を駆使した特別仕様のもが多く、印刷局製品のなかでも特に歴史的、技術的に意義深い「逸品」なのである。

改元と官報

官報とは

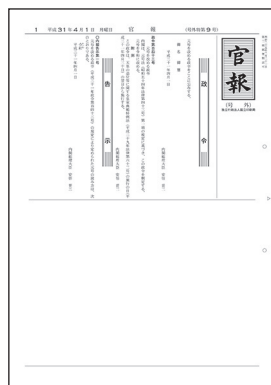
官報は、法律、政令、条約等の重要な情報を国民に周知するための「国の情報紙」で、行政機関の休日を除いて毎日内閣府が発行している。

印刷局では、明治16年の創刊以来、136年にわたって官報の製造を続けている。

改元にまつわる官報記事

明治改元は、官報の前身と呼ばれる『太政官日誌』において布告された。官報は大正、昭和、平成、令和の改元を見つめてきたことになる。

昭和までは、天皇が新元号を採択し、詔書によって改元が公布された。昭和54(1979)年の元号法の制定以降は、元号は政令で定めることとなった。官報には、号外記事として掲載されている。



昭和天皇の即位(大礼)

昭和天皇の即位と官報号外の発行

大正天皇の崩御によって元号が昭和へと変わり、昭和3年11月10日に、昭和天皇の即位の礼(大礼)が執り行われた。

印刷局では、式典が行われる京都に臨時出張所を設け、官報の速報記事を作成・印刷し、発行することとなった。記事の編集、印刷、販売事務に当たる職員20名が派遣され、当時の総務部長であった土屋耕二が、官報号外発行の総指揮に当たった。同時に、土屋は大礼使典儀官に任命され、式典への参列も果たした。

当日の官報号外の業務に際しては、記事が多数盛り込まれたこと、内容が極秘扱いであったことから、関係者は前夜から徹夜で作業に当たり、当日の17時になって無事発行することができた。



大礼記念切手 昭和3(1928)年



京都の臨時出張所前での記念写真
(前列左から5人目が土屋耕二)

大礼の記録

政府は、大礼の翌年、内閣に大礼記録編纂委員会を設置し、大礼に関する詳細な記録を残すことを閣議決定した。

印刷局は、A4判全25巻に及ぶ書籍を10セット分印刷・製本し、内閣に5セット、宮内省に5セットを納めることとなった。永久保存に耐えられるよう、用紙やインキ、のりなど材料の品質にこだわり、表紙や金箔の小口など、仕上げにも力を入れた豪華本『昭和大礼記録』は、昭和6年に完成した。

一方、印刷局は普及版として編纂された『昭和大礼要録』の製造にも携わり、本書は一般に販売された。